

反障害通信

24. 10. 18

159号

トランプ・ファシズム

最近、テレビのニュースが余りにもひどくなって、ユーチューブのリベラル系の情報番組を観ているのですが、イノベーション系の論者が、「かもしれない」という言葉を連発しながらですが、トランプが大統領に復帰したら、ウクライナ戦争を止められるかもしれないというような話をしていました。トランプは「私が大統領だったら、ウクライナ戦争は起きなかった」という話をしています。そもそも、プーチン・ロシアがウクライナへの特別軍事作戦と称して戦争を起こしたときに、バイデンは「アメリカは直接参戦しない」と言う主旨の発言を早々として、その発言自体が批判されていました。ですが、核戦争の恐怖・回避でのバイデンの発言です。「核抑止論」など空論にすぎず、そもそも核抑止論などで核「均衡」体制を作ったこと自体が世界の民衆の上に吊したダモクレスの剣（註）になっているのです。

トランプ政治は恐怖の上に立つ政治

トランプ政治は、「トランプは何をするか分からない」というところで、嘘とごまかしを連発しなかせら、軍事力とブラフやチキンレースしながら、自分の意志を世界に押し付けようとする恐怖政治です。そして、チキンレースには事故がつきものです。更に、プーチンの例があります。発想が似通っているのです。プーチンは「ロシアが滅びたら、世界が残っても意味が無い」と核使用を匂わせました。トランプはアメリカ・ファーストを連発しています。「〇〇ファースト」いう発想は、「自分ファースト」につながります。「自分が犯罪者として処罰されるなら、自分が権利者の座を追われるなら、社会が続いていても意味が無い」という発想につながります。そもそも選挙結果をなかなか認めず、未だにきちんと認めず、国会突入というクーデターのようなことをもたらした大統領が、また大統領候補として出てくること自体が信じられないことですが、四年間の任期の間に何をするか分からない、それだけでなく、四年で終わりにしないで、任期を延ばすとか、さまざまなことをやってくる可能性があります。わたしはナチスの政権獲得、ファシズム体制を作り上げていったことを想起してあります。そんな危機をとらえないで、「可能性がある」とか言って、待望論のようなことを言うひとの感覚が分からないのです。「もしトラ」の論議は「世界滅亡」の可能性もあるというところで起きている恐怖の中での議論なのです。

そもそも悪の権化としてのアメリカ政治

そもそも、アメリカは銃と大砲で先住民を追い払い建国し、長く奴隷制度を維持し、ベトナム、アフガン、イラク戦争を起こし、收拾できなくなって放り出すということを繰り返し、中南米でCIAのみならず、直接軍事力によって政権を覆してきた歴史をもっています。イランや北朝鮮を「悪の枢軸」とか言っていましたが、戦後の歴史をとらえるとアメリカは「悪の権化」と言わざるをえません。銃乱射事件が起きているのに、未だに銃規

制もしないままです。ダブルスタンダードでイスラエルのパレスチナの侵攻を支えているのもアメリカ政治そのものです。中国が攻めてくるとか、北朝鮮が攻撃してくるとか言っていますが、そのような話は独立しているところでの話です。地位協定の不平等性も解消できないで、「何をか言わん」です。日米の統一指揮系統などに踏み込んでいますが、今ある脅威は、日本が軍事同盟を破棄して、独立を勝ち取ろうとするとき、アメリカが自衛隊をそそのかして、クーデターを起こす現実性が一番高いのではないのでしょうか？

民衆の連帯のなかで、反核・軍備縮小・平和外交を！

そもそもファシズムの危機は国家主義・超国家主義とともにきます。国家という枠組みにとらわれるのではなく、民衆の反戦・反差別の運動と連帯しつつ、転換していくときではないかと念います。

アベ政治は、自民党党是だとして、憲法改正を第一の課題として、そのために財界の支持をとりつけるために、「世界一企業活動をしやすい国」と称して、大企業・金持のための政治、労働者の搾取体制を強め・進めてきました。そういう中で、日本は「経済大国」の地位を滑り落ちていきました。アベノミクスの弊害が経済に影をおとしてもいます。そのことを逆手にとって、もはやG7などという先進国支配体制を打ち捨て、国家主義を否定し、グローバル・サウスの民衆とその政府を捲き込んで、世界の民衆と連帯して、反核・軍備縮小・平和外交を、戦争被ばく体験に根差した反核ということも含めて推し進めるときではないのでしょうか？

(註) ダモクレスの剣

栄華の中にも危険が迫っていること。シラクサの王ディオニシオスの廷臣ダモクレスが王位の幸福をほめそやしたところ、王が彼を天井から髪の毛1本で剣をつるした王座に座らせて、王者の身边には常に危険があることを悟らせたという故事による。(「デジタル大辞泉」)

(み)

(「反差別原論」への断章) (89) としても)

HP 更新通知・掲載予定・ブログのこと

- ◆ 「反障害通信 159 号」 アップ(24/10/18)
- ◆ 「反差別資料室C」の「文献室」、新しい本の購入や読書に合わせて、今年5月の末に1年余ぶりにリアップしました。
- ◆ メインホームページ「反障害－反差別研究会のHP」のIV. F [廣松ノート] <http://www.taica.info/hiromatunote.html> に『物象化論の構図』 <http://www.taica.info/bskz.pdf> をアップしました。
- ◆ 「反差別資料室C」で、「B. 「反差別原論」断章」に掲載していた原稿の内、反原発・反核問題に関説している論考を重複させて、「E. 反原発・反核」にも掲載しました。最初の () 内数字が、「E. 反原発・反核」の通し番号、次の(8)以降の () 内数字が、「B. 「反差別原論」断章」の通し番号です。ちなみに、最後の数字は、所収している「反障害通信」の号数です。

読書メモ

[廣松ノート (6)] の『物象化論の構図』の5回目、最終回です。

たわしの読書メモ・ブログ 671 [廣松ノート (6)]

・廣松渉『物象化論の構図』岩波書店 1983 (5)

跋文—物象化理論の拡張

第一段落—この跋文の「序」的問題設定 265P

「序文にも誌した通り、本書は『物象化論の構図』という一般的な題名を掲げておりながら、本文はたかだか“マルクスにおける物象化論の構制”に就いてしか論じておらず、著者自身の構想する「物象化論」に描出するものにはなっていない。——物象化論は存在論や認識論にも関わり、亦、体系構成法にも係わる構制であるからして、跋文(「あとがき」のルビ)という限られた紙幅で全体的な構想を説述ことは固(「もと」のルビ)より期しがたい。とはいえ、著者としては『存在と意味』第二巻「実践的世界の存在構造」の上梓に先立って公刊される本書において、実践的世界の物象化的相在の機制について方法論的部面の一端なりとも予示し、併せて亦、既刊の『存在と意味』第一巻「認識的世界の存在構造」においても既に著者の謂う物象化の或る位相が批判的に扱われていることを顕らかにし、両巻さらには第三巻「文化的世界の存在構造」における物象化論の通底を表白しておきたいと念う。／爰では、しかし、正規の概説的論述法は断念し、本文中で論究したマルクス・エンゲルスの物象化論を如何なる方向と配備で継承的に拡張しようと庶幾するのか、大枠としてはこの論脈に則する形で綴ることにしたい。」 265P

第二段落—物象化の規定とフェノメナルな世界の物象化された実相

「物象化とは、日常的な語義に即すれば、“何かしら或るもの”が“物象”へと“(変)化する”ことの謂いとなる。が、しかし、マルクス・エンゲルスの場合もそうであったように、テクニカル・タームとしての「物象化」という概念においては、日常的な既成的表象との離接を明確にしてかかる必要がある。さもないと、悲喜劇的な混乱に陥りかねない。」

266P

「日常的な既成観念においては、物象化というさい、物象へと化する当の“何かしらの或るもの”は、それ自身ではまだ物象ならざるものの筈であるところから、——そして、物象と心象とを排中の二元化して——“心象的な或るもの”とみなされやすい。ないしは、また、物象とは客体的なものの謂いとされ、主体的なものとの客体的なものとの排中の二元化されること伴って、それは“主体的な或るもの”とみなされやすい(現に、M・ウェバーやルカーチにおいては“主体的な或るもの”の物象化という構図で考えられている)。だがしかし、マルクス・エンゲルスは、そしてまた著者も、近代哲学ひいては近代的常識流の“物的なもの”と“心的なもの”、“客体的なもの”と“主体的なもの”との安直な二元論的な対立性を原理的な場面では却けてかかるのであって、従って、われわれの場合、“物象へと化する或るもの”は、いわゆる“心象”でもなければ、単純に“主体的なもの”でもない、それでは、それは一体何か? さしあたり形式的・一般的に答えておけば、それは一種独特の「関係」である。が、「関係」というとき、近代的二分法に囚われて、単なる

“主観的關係”、単なる“客観的關係”という具合に振り分けては不可であり、遡っては、「關係」ということを“もの”化して、關係というものの相で表象しては不可である(因みにマルクスは「人格の物象化」という言い方をしている場合もあるが、その「人格」は「社会的關係の一総体」なのであり、溯行すれば「關係」規定に帰趨する)。——ここに謂う「關係」を積極的に規定しえんがためにも、議論を一たん先へ進めておこう。／物象化というさいの「化(する)」についてであるが、これまで日常的觀念では、水が氷に化するとか、毛虫が蝶に化するとか、酸素と水素が結合して水に化するとか、いわゆる客観的變化、つまり、能知的認識とは無關係に進行する客体的過程の相で表象される。しかし、マルクス・エンゲルスの謂う物象化は、そしてまた著者の謂う物象化も、このような“純然たる客体的變化”ではない。学理的省察者の見地にとって(für uns)一定の關係規定態であるところの事が、直接的当事意識には(für es)物象の相で映現することの謂いである。——但し、このさい、映現(「シャイネン」のルビ)というのはあくまで学理的省察から言っただけのことであって、当事者にとっては、直截に“物象の相で存在する”と言われうる。“物象の相で存在する”ということは、単なる認知的事態ではなく、当事者にとっては、彼の感情や意志はおろか、行動をも規制するとき相で“存在”することを意味する。——斯かる事態をを称して学知的省察者たるわれわれにとっての關係(Verhältnnis für uns)が当事者にとっての物象(Sache für es)と「化する」という言い方をする次第なのである。」266-7P・・・61Pからの参照指定あり

「茲で、そもそも「物象」とはいかなる存在であるかを規定することが要件となる。当座の行論に必要な限度内でこれを規定しておこう。／「物象」は「實在態」と「意義態」との二類に大別されうる。實在態は「物的」なそれと「心的」なそれとの二種に岐れ、意義態は「意味」と「価値」との二種に岐れる。——實在態に意義態の“受肉”したもの(という相で思念されるもの)を「用在態」と呼ぶが、この「用在態」は、意義態の二種すなわち意味と価値とに応じて「徴相」としてのそれと「財的」なそれとに岐れる。／實在態の二種は、それぞれ(「物的實在態」としての)「物的実体」「物的性質」「物的關係」および(「心的實在態」としての)「心的実体」「心的性質」「心的關係」という三種に区分される。(このさい、「性質」にはいわゆる「機能」をも含め、「關係」にはいわゆる「構造」をも含める。尚、ここでの「關係」は実体的な項を先件として成立する第二次的な後件として了解されている)。意義態の二種は、それぞれ(「意味的意義」としての)「意味本質」「意味状相」「意味聯関」および(「価値的意義」としての)「価値本質」「価値状相」「価値聯関」という三種に区分される。／用在態の二種は、それぞれ(「徴相的用在」としての)「徴相本体」「徴相性状」「徴相関連」および(「財的用在態」としての)「財的本体」「財的性状」「財的関連」という三種に区分される。」267-8P

以上を表記した図(これは「読書メモ」文末に「附録「物象」の規定態図」として掲載。なお原図は、二つの図になっていたのをひとつにまとめる等、わたしがかなり編輯しています。)を載せて、文が続きます。

以上を表記した図を載せて、文が続きます。

「物象性の徴標としては、①能識的能知から独立に存在すること、いわゆる「客観性」、②人間的主体から独立に自存すること、いわゆる「客体性」、③内自的な「合法則性」

(Gesetzmäßigkeit すなわち、それ自身で自足的に具えている構造的聯関性ないし法則的連関性)を共通に挙げるができる。が、これら三者に加えて、(イ)実在態は④時空間的⑤没意義的、(ロ)意義態は、④'超時空的、⑤'有意義的、(ハ)用在態は、④時空間的、⑤'有意義的であるものと思念されている。／「物象化」とは畢竟するところ、右に規定したごとき「物象」的存在、すなわち実在態(①②③+④⑤)ないし意義態(①②③+④'⑤')ないし用在態(①②③+④⑤)へと、先述の意味で“化する”この謂いにほかならない。」269P

「ところで、物象化現象そのことは、自存的「客観性」とか、内自的「合則性とか、所謂「時空間性」とかいう今日概念を推及しうるかぎり、人間の認識とともに旧く、何も近代知に特有のことではない。——近代科学に限っていえば、科学的対象知は「意義態」(これは自存視するとき、“超時空的”つまりはマルクスの謂う超感性的 *übersinnlich*、超自然的 *übernatürlich* な相貌を呈し、イルレアール＝イデアールな存在性格を呈する)の存在を認めながら、これをも可及的に実在態へと還元しようと努める。(その点、哲学は、伝統的な形而上学が典型であるが、「意義態」の物象化的自存性を積極的に追認することを必ずしも厭(「いと」のルビ)わない)。近代科学といえども意義態を全く無視してしまうことは叶わぬかぎり、実在態に“受肉”した「徴相」や「財的」存在を対しようとするが、そのさい、近代科学は実在態を可及的に物的實在に局定しようとするが、心的實在をも物的實在に還元しようと努めるのが普通である。近代科学はこのような構えのもとに営まれており、万象を可及的に物的實在に還元して説明しようと試みてきた。われわれの見地から言えば、近代科学のこの構えは「物的實在」への物象化に強く捉われている所以となる。」269-70P

「このように誌すとき、読者のなかには、いわゆる精神的現象やいわゆる価値的現象を物的な實在に還元するのは“物象化”であり“錯誤”であると“認め”たうえで、しかし、もともと物的な存在で或る対象を物的な実在態として扱う自然科学はまさに如実の相をそのまま認識しているのであって、それは何も物象化ではないのではないか、物象化という概念は“自然界”“自然科学的对象認識”には適用すべくもないのではないか、このように反問されるむきを生ずるかもしれない。——だが、われわれの見地にとっては(*für uns*)いわゆる物的實在態それ自身が物象化の所産なのである。すなわち、客観的に自存する物的実体、そのような実体の具備している物的性質、そのような実体の間に成り立つ物的関係、自然科学が対しようとするこれらの物的實在態それ自身が既にして物象化の所産にほかならない。このさい、カント流の“物自体”(Ding an sich)の“純粹客観性”とやらならば当座の議論しては暫く譲っておいてもよいが、いやしくも現実に認識されているかぎりの物的實在態は、さしあたり「現相的所与—意義的所識」成体が自存化されたものであるというのが実情である。ひとまず端的に言い切っておけば、自存的な客観相で思念されているいわゆる実在態なるものは、真実には「能知—所識」関係態(剗切には、『存在と意味』第一巻で縷説(「るせつ」のルビ)したごとき「能知・能識—所与・所識」の四肢的關係態)が物象化された被媒介的所産なのである。」270-1P

「右の断案に裏付けを与えるためにも、議論を一步先へ進めよう。先刻来、近代流の視界に半ば妥協する流儀で「実在態」と「用在態」とを峻別する議論の運び方をしてきたのであるが実を言えば、人々が没意義的な実在態として思念しているところのものも、実際には既に、一種の用在態である。というのも、原理的認識不可能なカント流の“物自体”や

アリストテレス流の“第一質料”といったものを積極的に立てるのでないかぎり、およそ認識可能な対象態は、少なくとも「現相的所与—意味的所識」成態であって(この間の事情については『存在と意味』第一巻の「緒論」および第一篇第三章第一節、さらには、第二篇第二章第二節、第三篇第三章第一節などを参看されたい)、そこには、意味的所識という意義態の一種が既に“受肉”しているからである。——人々が「用在態」と区別して「実在態」を思念しているさい、そこでの実情は、用在態から「価値的意義」を捨象したかたちになっているが、ここにあっても「意味的意義」は構造内契機をなしている。われわれとしては、当の「捨象」を仮りに追認するかぎりでは、論者たちの思念する実在態なるものが没価値的であると一応認めておいてもよい。がしかし、人々に現実に現前する対象態は、当の「捨象」以前の現相であるからして、価値的有意義性をも“帯びて”おり、現実には、語の広義における「財的用在態」であることが指摘されねばならない。(価値的有意義性、つまり広義の「価値」と言うさい、著者としては、(a)「欲動的」、(b)「評価的」、(c)「実践的」、(d)「評定的」、(e)「審美的」、(f)「信仰的」の諸価値を区別する。(a)は、快・不快のごとき好悪(「こうお」のルビ)的情動価値からいわゆる効用的使用価値まで含み、(b)は、Wertung(価値)に関わるものであって、広義における“経済的”収支価値、生態学的価値をも含む。(c)は、目的・手段的、当為・規範的、正義・債務的……等々、(d)は、beurteilen(評価)される真偽・良否・正邪、等、(e)は、美・醜、崇高・低劣……等、(f)は、聖・俗、絶対・相対……等、である)。——没意義的な実在態(用在態ならざる純粹な実在態)なるものはハイデッガーが用在(Zuhandensein)と物在(Vorhandensein)の区別に即して指摘している通り、意義性の契機を捨象しつつ、“学理的に”措定・構成された第二次的な成態にすぎないのである。」271-2P

「こうして、既成的思念を卻けつつ、実態を省察するとき、現実に直接的な相で現前する現相態は、いわゆる“自然界”の分節肢たる“自然物”をも含めて、実は「意義性」(意味性・価値性)を“帯び”た「用在態」である。このことに鑑みれば、第一次的存在であるかのように思念されている“裸の自然物”“物的実在”なるものは被媒介的に措定されたものであり、しかも、それは、上述の構制からして、物象化された一所産なのである。(誤解のないように書き添えておけば、物象化された世界像に定位するとき、実在態とりわけ物的実在態が第一次的・基底的存在で、用在態は第二次的・上架的存在として処理されること、われわれはこのことを否認するものではない。“裸の自然物”“物的実在”を第一次的・根本的存在みなして体系を構築する或る種の学理的手続をわれわれは顛から排除してしまうつもりはない。或る種の存在的な(「オンティシュ」のルビ)取扱いの次元では、“物的実在”の基底性・第一次性という思念を“追認”することも許されうる。但し、存在論的(「オントローギッシュ」のルビ)に省察するかぎり、それは被媒介的な物象化された所産であることが対自化されざるをえない。——このさい、物象化とは決して単なる“主体的なもの”の“客体化”の謂いではないことをあらためて銘記されたい念う。)」272-3P

第三段落——『ドイツ・イデオロギー』の「フォイエルバッハ」からと『資本論』からの展開——「一つの歴史」としての、就中、「歴史化された自然」について

「読者は、此処でおそらく、本書の本文中で繰り返し引用できた『ドイツ・イデオロギー』のあの有名な条りを想起されることであろう。マルクス・エンゲルスは、「フォイエルバッ

ハは、とりわけ自然科学の直観について語り、物理学者や化学者の眼にしか開示されない秘密[つまり、日常人の眼に見えない事柄の真相]に言及しているが、もし産業や商業がなかったとしたら、一体どこに自然科学がありえよう？ “純粹” 自然科学といえども、その素材どころか目的をすら、商業と産業によって、人間の感性的活動によってはじめて手に入れるのである。」「最も単純な“感性的確知”の対象でさえ、社会的発展、産業ならびに商業交通によって与えられているのである。……一定の時代の一定の社会のこの営為によってはじめて“感性的確知”に与えられえたのである。」と主張し、「それほどまでに、この活動、この間断なき感性的労働と創造、この生産こそが、今日実在する全感性的世界の基礎なのである」とまで言い切っている。——この了解に応じて、「歴史は二つの側面から考察され、自然の歴史と人間の歴史とに区分されうるが、しかし、両側面は切り離すことができないのであって、人間が生存するかぎり、自然の歴史と人間の歴史とは相互に制約しあう」ことに定位しつつ、「唯一の学」としての「歴史の学」を彼らは構想していたのであった。」 273-4P

ここから小さなポイントの文が続きます。廣松さん独特の、普通のポイントの文への自問自答的文です。「右に引用した一連の条を読むとき、人間の对象的活動による“自然改造”という事実の指摘が殊更に印象づけられるのではないかと惧れる。……がしかし、この“自然改造”つまり、人間の感性的・对象的な活動によって実地に生ずる自然界の変容ということは、事柄の一部門にすぎない。」 274P

「読者は、先に引用文中に「物理学者や化学者の眼にしか開示されない秘密」云々とあったことを憶えておられるであろう。マルクス・エンゲルスの整理によれば、フォイエルバッハは「直観」というとき、二重の相で考えている。その一つは、“肉眼に明白な”相での自然的物事を看取する普通の日常的直観であり、もう一つは、“真の本質”の相での物事を看取する高次の学問的直感である。後者が嚮に謂う「物理学者や化学者の眼」に当たるものであり、フォイエルバッハとしては、この学問的直観のほうを日常的意識よりも上位に置いている。……」 275P

「学問的自然像と呼ばれるものは、決して文字通りに“頭の中”にあるものではなく、まさしく人々の外部にある大自然そのものと別物ではないのである。この意味での「大自然」つまり「物理学者や化学者の眼に開示される自然」、これは人間の活動によって実地に直接的に変化するものでこそなけれ、やはり、歴史的・社会的に相対的な、歴史的所産なのである。——マルクス・エンゲルスは、この構制を少なくとも即自的には把えていたが故に「感性的世界をそれを形成しつつある諸個人の(結合された)総体的生動的な感性的活動として把握する」立場を自己のものとし、「自然の歴史、すなわち、いわゆる自然科学」と言い方を敢てなし、「自然の歴史と人間の歴史とは切り離すことができない」と言って、「唯一の学」としての「歴史の学」を構想しえたのだと忖度される。」 277P

「「肉眼に明白な相での自然」、人々が日常的に関わっている直接的な対境的自然は、人々の対象変容的な活動によって実地に歴史化されているだけでなく、その「開示され方」においてもまた間接的に歴史化されている。／総じて、自存的な相で現前する自然界なるものは、「学問的直観に開示される相」であれ、「肉眼に明白な相」であれ、実際には「諸個人の(結合された)総体的生動的な感性的活動」の物象化に俟って現成している「歴史家さ

れた自然」なのである。」 278P ここで長い小さなポイントでの文が終わっています。

「マルクス・エンゲルスは、……「自然化された歴史」と「歴史化された自然」という二個面・二契機のうち、前者にかかわる「歴史の自然的物象化」については一定の体系的論述をしたのであったが、後者にかかわる「自然の歴史的物象化」については立ち入った論述を遺していない。／著者が、「自然的実在態」の次元にわたって物象化論の構制を“拡張”“展開”しようと企図するのは——著者自身が課題を自覚化した経緯とは別に、これを第三者的にみれば——マルクス・エンゲルスが構想しつつも“仕残した”構案を埋めようと庶幾(しよき)するものとして位置づけられることもできよう。」 278P

「惟うに、マルクス・エンゲルスが当の構案を充当するまでに至らなかったのは、単なる時間不足の所為とばかりは言い切れない。彼らは(フォイエルバッハ批判の論脈で彼ら自身が“区別”している歴史的自然の二つの“相”に対応づけて言えば)「肉眼に明白な相での自然」(日常生活世界)の実地的歴史化を説く構制は、生産活動という対象的活動・実践の場に定位しつつ明白な形で保有していたが、それにひきかえ「物理学者や化学者の眼に開示される“秘密”の相での自然」(いわゆる“科学的実在”世界)の歴史的相対性という事態を説述するための認識論上の概念装置については、これを十全な形で具体的に定式化するには今一步のところ止まったように看ぜられる。(尤も、晩年のエンゲルスは、この部面でも貴重な省察を書留めてはいる。が、最終的な定式までは達していないと見るべきであろう。この件について論ずるためには、前後十余年にわたって書綴られた遺稿『自然弁証法』のテキスト・クリティークが前提になるので——因みに、永年にわたって書き進められたこの遺稿は、時系列に沿って精読してみれば、新層において旧層における所論を自己批判・撤回している論点も幾つかあり、新層では『反デューリング』での“悪名高い”論点の“撤回”もおこなわれているのだが、スターリン時代に編輯し直された現行版では、何と手稿・覚書の新旧層の層別を無視して“切貼細工”による体系化が強行されており、現行版によったのではとうていエンゲルス晩年の *Verfassung* (著述)が泛かび難い——、ここでは立ち入らないでおく。)」 279P

「著者のみるところ、マルクス・エンゲルスが“科学的実在”としての自然像の歴史的相対性を認識論的に説明する概念装置を整備するうえで直面した困難な点は、就中、感性的現相世界の二肢的二重性の構制を汎通的に措定する場面に存した。それも了解に難くない。現相世界の二肢的二重性という構図だけであれば、アリストテレス流の「質料—形相」論や、カント流の「質料—形式」論、これら両者を“止揚”したヘーゲル流の配備という先例もある。が、ヘーゲル流のイデアリスムスを克服しつつ当の構制をわがものとするにあたっては、いまマテリアの契機は措くとしても、アリストテレスが「形相」を形而上的実体として錯認した所以のもの、また、カントが「形式」をアプリアリな主観形式として誤って定位した所以のもの、これらを内在的に剔抉(てっけつ)しつつ、存在論的・認識論的に事態を根底から把え返すことが先決要求となる。——今日のわれわれは、マルクス・エンゲルスの晩年以降に幾つかの学派が展開した正・負の遺産を参酌することによって、現相世界の二肢的二重性の構制を比較的容易に定式化しうるが、マルクス・エンゲルスの時代にはこの作業は一から始め直す必要があったのであり、難渋も余儀なかった道理である。」 279-80P

「翻って言えば、しかし、マルクスは、あの時代にあつて、この課題を解決する先陣を切っていたのであり、われわれはその記念碑的事実を『資本論』のうちに読み取ることができる。『資本論』は存在論や認識論を直接的な主題とする著述ではないので、そこでは勿論、現相的世界が扱われているわけではない。とはいえ、マルクスが「商品世界」に即して、その二肢的二重性(ひいては四肢的連関構造)を闡明(せんめい)し、商品世界の存在構造と成立機序を究明しているさいの達見は、われわれにとって、世界全般の存在構造と成立機序を討究するにさいし、範型となしうる構制を開示している。——本文、とくに第Ⅲ章で見た通り、マルクスは商品世界の諸対象を使用価値と価値という二要因性の統一相で把えるにあたり、「商品」を「感性的で且つ超感性的な事物」(ein sinnlich übersinnliches Ding)として押さえ、「レアル・イルレアル」の二肢的二重性を述定している。「商品価値」は、それ自身を自存的なものの相で对象的に規定しようとするとき、「超自然的(übernatürlich)」であり、そのかぎりでは“形而上学的”であること、但し、これを自存視するのは「物象化」的錯認であり、真実にはそれは一定の社会的関係の反照的規定態であること、このことをマルクスは指摘して余蘊(ようん)がない。

「マルクスが価値を体化している商品の分析によって開示しているのは、著者流に「意義態」を「意味的所職」と「価値的所職」とに分けて論じる見地かから言えば、さしづめ、価値的有意義性を体化している「財的用在態」の存立構制である。——マルクスは使用価値といえども、単なる自然的属性ではなく、それ自身一種の価値的有意義性であることを当然承知してはいた。が、『資本論』の行文では、あたかも使用価値は単なる自然的属性であるかのような扱い方を辞せぬ流儀で議論を運んでおり、況んや「自然物」についてはその二肢的二重性に立入っていない。しかし、著者流の立論を俟つまでもなく、「自然物」といえども決して端的に没意味・没意義ではない。「自然物」は、よしんば、財的意義・価値的意義こそ帯びていないにせよ、しかし、微相的意義・意味的意義を既にして帯びており、少なくとも「意味的意義」を構造的契機とする二肢的二重態である。——われわれとしては、マルクスが闡明した財的用在態の二肢的二重性の存立構制を推及するかたちで、微相的用在の二肢的二重性、すなわち、「意味的意義」を構造内的契機とする二肢的な二重性を対自化することができる。このさい、しかも、マルクスの開示した「として現象する(als et. erscheinen)」「として妥当する(als et. gelten)」の構制に定位することが許される筈である。あまつさえ、われわれは、マルクスが価値的有意義性の間主観的被媒介性と社会的関係の物象化を明らかにしたところに倣う形で、意味的有意義性の間主観的被媒介性と社会的関係の物象化を定位する途に就きうる。」 282P

「著者としては、まさしくこの継承的拡張、すなわち、マルクスが“価値的有意義性”に即して定位したところを“意味的有意義性”一般にまで推及する拡張的展開を志向する次第であつて、このことによって、実は亦、懸案として遺されていたところの、自然像一般の歴史的相対性、ひいては、「自然の歴史的物象化」の機制を認識論的・存在論的に説明する概念装置を確保できると考える。——抽象的に図式化して言えば、著者はこの脈絡において「マルクス物象化論」の構制を継承的に拡張・展開しようと庶幾する。」 282P

第四段落——物象化論において「イデアールの「意味」を押さえる

「著者が嚮に述べた「実在態」レヴェル(実際問題としては「微相的用在」のレヴェル)にお

ける物象化を剔抉・批判するにあたり、マルクスが商品世界に即して開示した“レアール・イルレアール”の二肢的二重性(剝切には“イルレアール”な契機の存立を相即的に支える契機を含む“四肢的連関構造”)の構制を、“下向的”に一たん“抽象化”しつつ、存在論的・認識論的に“一般化”した範式に定位しようと志向していること、この間の構図的脈絡までは以上の立論によって大凡の理解を得られたものと念う。——尤も、著者自身の表層的意識における着想の経緯に則していえば、認識論に内在的な別途の論脈が基軸をなしたのであるが、ここでは事後的に対自化されたマルクスとの継承関係に議論を限っても差支えあるまい。——」282-3P

「慧眼(けいがん)な読者は、著者が「意義態」(いわゆるイデアールな「意味」一般、ならびに、価値哲学に謂う広義のトランセントデント(*transcendent* 超越的な)「価値」一般、を含む)の物象化をどのような論趣で処遇しようと図るか、もはや察知ずみのことかと畏れる。——著者は、物象化現象を、単なる幻影と銘打って顛から無化しようと試みるのではなく、マルクスに倣って、それが厳然たる対象的相貌で現前し、人々の認知的な意識を規制するばかりか、人々の感情や意思はおろか、行動をも現実的に規制すること、この事実をまずは“追認”する。この場面で言うかぎり意義態は歴(れっき)のルビ)とした“客観的对象性”として人々(当事者、および、当事者たちとヒュポダイム(*hypodigme*)を共有するかぎりでのシステム内在的な“学知”)に意識されるのであって、そこで、当の「意識態」の存在性格を追尋してみると、哲学者たちが言葉に窮して、“超時間空間的”とか“非実在的(「イルレアール」のルビ)”とか“イデアール(つまりプラトンの「イデア」のような)”とか“超越的(「トランセントデント」のルビ)”とか呼ぶ奇妙な存在性格を呈する。「意識態」(意味や価値)というものが客観的に厳存すると思念する場合には、それが通常のレアールな存在とは存在性格を異にする“奇妙な存在”であることは否認すべくもない。……古代や中世の哲学者たちのとらえ方の押さえを挿んで……省みるに、ここで擧(ぬきん)のルビ)でているのが、マルクスの達見である。彼は意識態(といっても彼の場合はさしあたり経済学上の「価値」)の物象化の秘密を解明しえたが故に、一往は“安んじて”人々の日常的思念に即するかたちで、それが「超感性的」「超自然的」「形而上学的」であることを指摘さえもする。現に、商品世界における人々の価値評価意識を規定しているだけでなく、人々の経済活動を客観的に規制し、社会経済の編制と経済法則の客観的規定因子をなしている「価値」は、厳存しているものと一往は認められねばならない。だが「価値」、一般化していえば「意義態」なるものが独立自存するとみるのは物象化的錯視であって、それは(一部論者が考えるような“主観的評価・主観的感情の投射”といったものではなく)まさに一定の社会的関係の屈折的映現なのである。それは当の社会的関係という現実的基盤をもつものであって、決して単なる幻想的妄念ではないが、しかし、超感性的・超自然的な価値なるもの、意識態なるものが客観的に自存するとみなすのは物象化的錯認である。——マルクスは、für es な視座におけるイデアールな意義態が für uns には、「人々の対自然的かつ相互的諸関係」の物象化的映現であることを剔抉してみせる。著者としては、マルクスが直接的な主題とした経済学上の価値に限らず、いわゆる価値哲学に言うトランセントデントな「価値一般」、ひいては、言語的・記号的意味を典型とするイデアールな「意味一般」も、同趣の物象化的所産として把え返そうと企てるのであって、これはマルクスの

価値物象化論の直截な継承的拡張であると自任する。」284-5P

次の段落へのつなぎの文「著者が『資本論』におけるマルクスの物象化論の構制を「意義態」一般、ひいては、「用在態」一般(従って、各種のいわゆる「文化財」)に推及するにあたり、諸々の次元と種類にわたる物象化現象の各々に応じて、謂う所の「社会的諸関係」を具体的に指定すべきことは断わるまでもない。——今ここでは、もとより各論に立進む趣意はないが、推及的拡張の一般的構案に関わるかぎり、所懐の一斑を次に述べておこう。」285P

第五段落——物象化論において「社会的関係」を押さえる—「役割理論」からの押さえ

「物象化」を生ずる当の“何”について、嚮にはそれが一種の「関係」である旨を一言するに止めておいたのであったが、今やその「関係」そのことの構制を主題化する段である。このことを通じて、マルクスの物象化論を推及的に拡張する構案をも好便に提示できることと念う。」285P

「読者は、「物象」と“化する”「関係」態について、著者が行文中「所与・所識—能知・能識」の四肢的關係態という言い方をしたことを已(「すで」のルビ)に見咎められたかもしれない。この言い方では、「能知」と「所知」とがそれぞれ二肢化されているとしても、“所詮は「主観—客観」という近代哲学流の装置の枠組内に留まっているのではないか”という譏(そしり)を招いたとしても寧(「むし」のルビ)ろ当然であろう。現に、著者にとって、「所与・所識—能知・能識」の四肢的關係態という立言は近代哲学流の図式との接点をもたせるために敢て選んだ暫定的な定式であって、これに止まるべくもない。実際には、この版式に登場する「所識」も「能知」も「能識」も「対他—対自」的な関係規定の反照的結節なのであって、当の範式自体、内自的な四項関係で閉じはしないのである。」286P

「翻って、マルクスは、本文中でも繰り返し見た通り、人間の本質を社会的諸関係の総体として規定すると同時に、社会とは人々の関係・関連そのものにほかならないと規定する次第であるが、彼の謂う社会的関係は、範式化していえば「人々の対自然的かつ相互的な関係(Verhältnis der Menschen zur Natur und zueinander)」という『ドイツ・イデオロギー』の成句で標記することができよう。そして、この「人々の対自然的かつ相互的な関係」の基底的成層・基幹的構造をなすものが、「生産関係」にほかならないことは、あらためて記すまでもあるまい。——著者としては、この範式に異を唱える趣意からでなく、マルクスの謂う「社会的諸関係」の物象化を各種現象の場に推及するさいの便を図って、幾つかの概念装置をこの範式そのものの内部に持込み、それを具象化することを試みる。この試図は、同時に亦、前記の四肢的連関係の範式を一つの射映相とするとき「対他—対自」的な「間主体的かつ対与件的」関係態の定式化を期すものでもある。」286P

「図式的にいえば、著者としては、茲で、マルクスの“対自然的かつ間(「かん」のルビ)人間的な関係”という範式に「役割理論(role—theory)」の構制——といっても、いわゆるアメリカ社会学流のそれだけでなく、カール・レーヴィットがフォイエルバッハを批判的に継承しつつ導入したタイプのそれ——を加味することで、当座の要件を充たすことができるのではないかと考える。」287P

「著者は、いわゆる認識といえども実践的な世界・内・関係の構造的契機として定位すべきことを主張し、能識的主観としての間主観的同型化や意味的所識態の共同主観的同型

性が成立する機序をも役割論的構制における「対他—対自」関係に根差すことを高唱する者であるが、認識論的な場面に属するこの件については今は立入るを須(「もち」のルビ)いないであろう。」287P

「今爰では、また「役割論的構制」とはいかなる構制であるかを詳しく述べ立てるに及ばないであろう。が、マルクスの謂う「人々の対自然的かつ相互的な関係」に役割論的概念を読み入れる(「ヒナインレーゼン」のルビ)ポイントだけはひとまず述べておかねばなるまい。——マルクスの謂う「対自然的かつ相互間的」関係は、人々の「対自然関係」と「相互的な関係」の分断を許さぬものであり、両者は相互媒介的・相互浸透的・相互規定的であるが、行論の便宜上、両契機を一たん別々に論題化しよう。」287P

「先ず「人々の対自然関係」であるが、これは単なる認知的な「主観—客観」関係ではなく、この認知的関係をも構造内的契機とする実践的な関係であり。そこでは「自然」は諸々の価値的有意義性を“帯びた”相で展らけている。生活の現場で展らける自然は、欲動的・評価的・……審美的・信仰的・……な価値相で意識に現前するばかりでなく、「興発的価値性」(正負の目標としての行動誘発性、一定の行為を誘起する信号(「シグナル」のルビ)的有意義性、といったものだけでなく、好悪の関心的態度を励起する次元での価値的有意義性を含む広義のそれ)、「手段的価値性」、それにまた「制約的価値性」(行動の積極的な条件となるものも障碍的な条件となるものも含め、行動の様式を規整する拘束性の全般)の相で対向している。このさい、具体的なイメージとしては、採取・狩猟・農耕といった場における対自然関係を表象するとコミュニケーションが付き易いかと念うが、それを概念化するには淵源における「舞台」(広義のそれであって、情景・背景・大道具・小道具などを含む)を表象しておくとも便利かもしれない。世界劇場(「ヴェルト・テアテル」のルビ)にもなぞらえうべき生活世界においては、自然の分節肢は、人々の関心的態度や正負の対向行動を誘発する対象として現前するだけでなく、一定行動の道具的手段ともなり、しかるべき目標行動を可能ならしめたり不可能ならしめたりする制約をなし、所期行動を助成したり阻害したりする条件ともなる。——マルクスは『資本論』においては、論件の限定上、労働対象ならびに労働手段としての自然にアクセントを置いて論じているが、われわれとしては実践的関わり一般における対象・手段・条件、総じて実践的関わりにおける“舞台”的制約場としての自然、これを配視することが許されるであろう。「対自然関係」は、かかる“舞台的”自然との交渉的連関という意味での、環境的自然への内・存在である。」288P

「ところで、舞台的自然なるものは万古不易の自己同一的な天然自然ではない。それは、その都度の行為に対しては多分に固定的な制約であるにしても、人々の営為によって不断に変容される。舞台的自然が既定的な所与であるというのはその都度の行為に対してのことであって、フェア・ウンスには、舞台的自然は「歴史化された自然」、人々の営為よる所産でもある。この契機をも勘案するとき、「人々の対自然的関係」は“舞台改造的な関係”でもあるのであって、総じては、「被制約的かつ改造的な“対舞台的”関係」であると言わねばならない。」288-9P

「更に言えば、舞台的な自然が「歴史化された自然」「文化化された自然」であることを対自化する以上、われわれは自然界と人事界との伝統的な峻別を止揚する必要に当面する。……慣習化されたことへの例示的論攷……或る種の論者たちは、これは人為(「ノモ

ス」のルビ的制約であって自然(「ピュシス」のルビ的制約とは峻別さるべきだと説く、われわれとしても、或る種の論脈では、勿論、自然と人為とを区別する。がしかし、論者流に自然的制約と人為的制約とを峻別する場合、理屈の場面での概念的区別が可能だとしても、現実問題として、人々の日常生活における“自然的制約”は多かれ少なかれ“人為的制約”に“浸透”されており、純然たる自然的制約など現実には殆んど存在しないと言わざるをえまい。そのうえ、当事者たちは、自然的制約と人為的制約とを日常的には明識に区別しないのが普通である。学知的に反省すれば人為的制約であっても、当事者の日常的意識においては“自然的制約”の相に物象化されてしまっている。……規範的・制度的な“人為的制約”であっても、それが対境的に物象化されてしまっている場合には、単なる規則的・コード的制約とは異なり、舞台的制約条件の一斑をなす所以である。」

289-90P

「われわれとしては、このような次第で、「人々の対自然関係」という契機を、歴史的に物象化された自然に関わる対“舞台”的關係、「被制約的かつ改造的」な内・存在としてベグライフエン(把握)してしかるべきであろう。」 290P

「次に、「人々の相互的關係」という契機であるが、生活世界においては、これが単なる認知関係以上のものであること、しかも、現実には、対“自然”関係から抽離された純然たる「人—人」関係としては存在すべくもないこと、このことは予め断るまでもない。生活世界＝世界劇場の舞台に登場する当事者たちは、その都度の舞台的場において、相互に価値性を“帯びて”おり、相貌・態度・表情・発声その他、「興発的価値」相における「他者」たちの現前によって「自己」の“行動”(態度・表情・発声などを含む広義の行動)を触発(「アウスレーゼン」のルビ)される。人々の相互的關係は、原基的な構制を範式化するとき、このような在り方で現存すると言えよう。」 290P

「著者としては、このような在り方に止目し、まずは、興発的価値性の現前に呼応して発動される行動を、その当事的他者ないし環視的第三者によって「期待(「エクスペクト」のルビ)」されている様式行動と(少なくともフェア・ウンスに)認めうる場合、それを当事他者に対する「役割演技(「ロール・プレイング」のルビ)」という概念に包摂する。遡って規定すれば、「他者によって期待される行動の——触発的に現前(「アウスレーゼント・フォルコメン」のルビ)する当事他者に対向しての——呼応的遂行」、この間主体的に共軌的な関係性における実践(これは、少なくともフェア・ウンスには概してコード随順的である)を「役割行動」と呼ぶ次第である。」 290-1P

「この際、著者としては、ステイタスやポジションを前梯にしてロールを規定する一部社会学者たちとは異なり、直接的・基底的な自他関係に即して「役割」という概念を規定していること、この点に留意を求めておきたい。「地位(「ステイタス」のルビ)」や「部署(「ポジション」のルビ)」というものは、役割行動の編制態が物象化され、一種の“制度化”をこうむることによってはじめて成立するものであって、これを「役割」に先在させるのは「物象化」された当事者の意識事態を追認した物象化的錯認と言わねばなるまい。——尤も、当事者たちの日常的意識においては、まさしくこの物象化的転倒が現実であり、人々は「地位」ないし「部署」の既成性を前梯にしてしかるべき行動の期待や遂行をおこなっている。このことを勘案して、地位ないし部署の既成化に照応する次元での役割演技を特

に「役割」扮技と呼ぶことにし、必要な際には「役割」一般から「役割」を次元的に区別する。」291P

「省みるに、マルクスというよりは、主としてエンゲルスの場合、「人々の対自然的かつ相互間的な関係」を「分業」関係として把え、階級関係すら分業関係の一定在形態として扱っている。これは「生産」活動に視軸を据える優れた配備であり、著者「分業」から一たん“下向”して、より一層抽象的な規定から“上向”しようとするだけであり、そのことによって、夫婦・親子・兄弟の関係などや、また、生産活動とは一見遊離しているかのようにみえる場面での人間関係などを、抽象的なるが故に普遍的な範式のもとに一たん統轄したうえで“上向”の過程で“種差”的な区別をも規定する途に就くことを庶幾する。「役割」論的な共軛的自他関係にまで一たん“下向”することは、マルクス・エンゲルスの「分業」論的配備の意思に抵触するものではありえない。——因みに、マルクスは『資本論』の序文において、経済的活動の当事諸主体を「経済学的カテゴリーのペルソニフィカチオン(*Personifikation* 人格化)として扱う旨を表明しているが、これは著者流に定位して言えば、当事諸主体を「役割存在」として扱っているものと言えるであろう。」291-2P

この項のまとめと次項へのつなぎ「以上「物象化」される当体としての「関係」、すなわち、マルクスの謂う“対自然的かつ間人間的”関係を“舞台的世界に内・存在する共軛的な役割関係”の相で把える構案を概述してきたが、これはあくまで本書の「跋文」という限られた場における便法的な立言であり、著者の謂う「役割論的構制」を正規に説述するためには如上とはおよそ別様な行文を必須とする。ここでは、しかし、「役割論的構制」ということそれ自身についてはこれ以上の紙幅を費すことを憚り、拙速をも省みず、役割論的構制をベースにしていかなる方向で物象化現象の剔抉を図ろうと志向しているのか、この件に論題を移す段である。」293P

第六段落——「役割論」をベースにして物象化論を押さえる

「物象化とが区別されねばならない。——なるほど、「認知的」と「実践的」との区別は絶対的区別ではない。今、「認知」といえども「実践」の一種であるという当然事を復唱するつもりはないが、「認知的次元での物象化」なるものも、厳密には認知的場面だけで完結するものではなく、「実践的次元での物象化」の構造内的一契機ないし射影的一位相にすぎないのが実情である。(また、認知的過程をぬきにしては、物理的変化は生じえても「物象化」はありえないのであるから、実践的次元での物象化といえども、認知的過程から端的に独立ではありえない。)とはいえ、認知的次元における所識的契機の編制を変えれば(この変更のために実践的次元における編制の更新が要件をなすとしても)、それだけで“解消”が一応は可能と目されるたぐいの“所識的物象化”と、認知的次元での編制替だけでは解消不可能な、敢ていえば、関係態的所与による「向妥当の制約」(『存在と意味』第一巻三六六頁参照)を主因とするたぐいの“所与的物象化”、つまりは、「所与」の「低位層」にまで実践によるアクチュアルな変化が及ぶたぐいの物象化とは、相対的に区別されうるし、現に区別されなければならない。マルクス・エンゲルスがフォイエルバッハ批判の論脈で立言している「物理学者や化学者に開示される相での自然」(一般化していえば、学者ならざる常人にあっても“学理的”省察に開示される相での対象)と、「肉眼に明白な相での自然」との区別は、今ここでの議論の準位にあっては、もはや愈々(いよいよ)絶対的区別ではなく、

相対的な意味しかもちえない。が、このことを承知のうえで、敢て比喩的に仮託していえば、同じく「自然の歴史的物象化」と言っても、前者に関わるのは「認知的」次元での“所識的物象化”であり、後者に関わるのが「実践的」次元での“所与的物象化”であると、呼ぶことができよう。(但し、「認知的」次元における物象化態と呼んでも、それは決して“主観の内部”にある単なる心像ではなく、まさしく人々の“外部”に厳然と開らせるいわゆる“客観的実在”にほかならないこと、それは単なる所識ではなく「所与—所識」成体であること、人々が宇宙ロケットを飛ばしたり物理・化学的な実験をしたりするのはこの「認知的対象相」での“自然”に対してであること、このことがあくまで銘記されねばならない。)」293P

「偕、「認知的」次元における物象化を指摘する場面では、「所与・所識—能知・能識」の四肢的連関態が物象的な対象相で当事的意識に映現する次第を別決すれば一応は済む。(なるほど、当の四肢的連関態は内自的に自己完結しているものではなく、まさしく「役割論的な構制」、「舞台の世界に内存在する対他・対自的な間主体的協働連関」の射影的一位相にすぎないのではあるが、さしあたっては、そこまで逐一的に溯源するには及ばない。)著者が『存在と意味』第一巻で論及した物象化はひとまずこの次元に納まる。——しかるに、「実践的」次元における物象化を別決するにあたっては、『存在と意味』第二巻が課題とするところでもあるが、直截に「役割論的構制」に恃(「たの」のルビ)まねばならない。」294P
「惟えば、マルクスの場合、「実践的」次元における物象化が論件をなしたとはいえ、彼はさしあたり、商品価値の物象化、経済法則の物象化、歴史過程の物象化、このたぐいの物象化を主題的に扱う域にとどまった。そのかぎりでは、マルクスは、人々の実践の在り方を問題にする場合、「経済学的諸カテゴリーのペルゾニフィカチオン(*Personifikation* 人格化)や「分業」「階級」という規定態に即して論じたり、一般化して考究するさいには、「諸個人の営為とその合成力」という準位で論じたりすることで、当座の要件を充たすことができた。」294P

「著者としては、しかし、マルクスの業績を継承的に拡張しつつ、「制度」の物象化、「規範」の物象化、「権力」の物象化、ひいては、「技術」「芸術」「宗教」などの物象化を射程に収めようと図る。——しかも、そのさい、制度といっても、部署・地位・身分の編制といった狭義の制度だけでなく、また、家族・社会・国家といった次元だけでなく、デュルケームのいう *institution* すなわち「言語」などをも含む最広義の制度を念頭においている。また、規範といっても、習慣や習俗から道徳を経て法にいたる一切の規制的有意義態を念頭においている。等々。——要言すれば、一切の経済的・社会的・政治的・文化的な歴史的諸形象(「ゲビルデ」のルビ)の物象化を、統一的な原理、統一的な方法のもとに論究しようと志向する。この志向の故に、著者の場合、「役割論的構制」を導入することが不可欠の戦略的要件となる。」294・5P・・・わたしが主題としている反差別論では、認識論的には「差異」の物象化がキーになり、唯物史観のとらえ返しにおいて、差別の土台的なとらえ返しから、また、差別の収束点として現れる「労働力」の物象化が要件となります。

「今ここでは、役割論的構制に即して各種の「実践的次元における物象化」がいかにように解明されうるか、これの各論まで立ち入る違(いとま)を欠くが舞台的与件の各種的価値相の物象化、役割関係の制度的物象化、役割行動におけるコードの規範的物象化、役割行動の

遂行にともなうサンクションの権力的物象化、役割編制態の通時的動態の歴史的物象化…
…等々、役割論的構制の構造的・機能的な諸契機の物象化という視角から「実践的次元に
おける各種の物象化」にアプローチしうるであろうことは、慧眼(けいがん)な読者の認めら
れるところであると信ずる。」 295P

「附言すれば、著者は、マルクス物象化論の方法論的構制、ひいては、彼の弁証法を継承
するにあたり、für es と für uns の構制を特に重視する者であるが、マルクスにあつてはフ
ェア・エスの次元が、「実際の当事者意識」と、「当事者たちと視座を共有するシステム内
在的な“学知”（体制内のパラダイムの地平にとどまっている先行学説の見地からの定式、
ないしは、当事者自身におけるありうべき省察的自己定式）との二義性を帯びているように
思える節々のある点は、離接を明白にする形で論考する途をとりたいと念う。」 295P

「不得要領、殊に後半部における臆言を愧(「は」のルビ)じつつも、とりあえず以上によつ
て、マルクスの物象化論を著者がいかなる配備のもとに、いかなる方向において拡張しよ
うと志向しているか、著者の抱懐する「物象化論の構図」を点描しえたものと念じ、当座
の筆を擱くことにしたい。」 296P

「解説 高橋洋児」(『廣松渉著作集 第十三巻 物象化論』岩波書店 1996 所収)

一 廣松哲学における物象化論の位置

「ある哲学の独自性は端的にその用語法に表れる場合がある。直ちに思い当たるのはハイ
デッガーの哲学であるが、廣松哲学もその典型例の一つと言えよう。廣松の独自の用語法
は、「関係の第一次性」「四肢構造」「事的世界観」をはじめとする幾多の新造語乃至新たな
概念装置にとどまらず、文章表現や表記法にも多様多彩な形で見られる。また、用語自体
は既存のものでも、独自の新たな意味づけがほどこされてキー概念としての位置を占めて
いるものも「共同主観性」「協働」「物象化」「役割」などなど、これまた数多くある。廣松
哲学によるパラダイム・チェンジは、まさに用語革命を伴いつつ用語革命を通じて行われ
たのである。」 415P

「目も眩まばかりのそれら多彩な用語群の中で、廣松哲学の独自性を最も包括的に言い
表しているのは、いうまでもなく「事的世界観」である。用語法という点でも廣松哲学の
集大成である主著『存在と意味』(本著作集第十五、十六巻に収録)の副題が「事的世界観の
定礎」となっていることから、そのことは明白であろう。事的世界観のことを野家啓一
は比喩的に「廣松哲学の奥の院」と表現している(本著作集第一巻、「解説」)。」 415P

「では、事的世界観と物象化論の一関係はどのようになるのであろうか。厳密な「式述」(定
「式」化した記「述」。これも、おそらく廣松用語の一つと言ってよかろう)を期そうとすれ
ば廣松著作からの引用を連ねるほかない。が、ここでは「解説」としての役目柄、あえて
厳密さを犠牲にしてでもなるべく簡明な見取り図を描き出すことにしたい。「解説」にも(「解
題」とは違って)多かれ少なかれ解釈の入り込む余地があり、というよりもむしろ一定の解
釈を伴うことは避けがたいとすれば、厳密な読解作業は、読者個々が「厳密な」読解と考
えるところのものにゆだねざるを得ないからである。そのための一つの手がかりを提供し
得れば、それで善しとしなければならない。」 415-6P

「さて、事的世界観はデカルトの定礎した近代的世界観およびこれに基づく物的世界観の地平をそのものを超えようとする。物的世界観によれば、まず独立自存する存在体(実体)があって、それら実体がもろもろの性質を具備し、相互に関係し合うものと了解されている。世界がそのような実体から成り立っているとする見方(これも、こまかく言えば廣松流には世界観の次元に関わることとして「観方」と表記される)は、「近代」人にとって馴染み深い常識となっているものであろう。」 416P

「だが廣松渉はこのような常識に異を立て、世界観そのものの刷新を、パラダイム・チェンジを図ろうとした。実体がまず自存して第二次的に関係し合うという見方は倒錯した認識であり、真実態としては、実体に先立って関係がある、むしろ関係規定性・関係規定態こそが第一次的存在であると主張する。森羅万象、一切の物どもが、このような関係主義の立場から再審に付される。」 416P

「しかし実体主義的存在観とも名づけられる近代的世界観はまことに根深いものがある。倒錯した認識は単なる個々人の錯覚などではなく、普遍的かつ構造的なものである。関係規定態が実体化して捉えられることが「物象化的錯認(錯視・倒錯視)と名付けられる。「物象化と呼ばれる事態は、……日常的意識にとって物象的な存在に思えるものは学理的に反省してみれば、単なる客体的存在ではなく、いわゆる主観の側の働きも捲き込んだ関係態の「仮現相(*quid pro quo*=錯視されたもの)」である事態を指す(「現代的世界観への道」本巻三頁)。このような錯視・錯認の規制を明らかにするための理論枠組が物象化論である。したがって物象化論は、「“実体”とはそのじつ何をどう錯視したものであるかを批判的に究明する」(本巻五頁)ものとして、終始、批判的な性格を帯びる。」 416-7P

「ただし、「錯視・錯認の機制を明らかにする」作業が、「何をどう錯視したものであるか」というときの「何」そのものの存在構造の解明作業と一体をなしていることは言うまでもない。存在構造を端的には関係規定態として把握しつつ、それがどのようにして実体視されることになるのかを明らかにするのである。しかも、後に見るごとく、廣松においては物象化論がマルクス物象化論を継承しつつ一般理論まで「拡張」されているので、解明されるべき存在構造の種類も、それこそ森羅万象にわたるほどの一般性を持つことになる。」 417P

「やや粗っぽく図式化するなら、事的世界観(関係主義的な存在観)プラス物象化的錯認イコール物的世界像(実体主義的存在観)、あるいは物的世界観マイナス物象化的錯認イコール事的世界観、という関連にあるわけだ。これが廣松哲学全体のおおまかな見取り図である。／このような図式化に対しては当然、そもそもパラダイムを異にする二つの世界観を「プラス・マイナス」という符号でつないで足したり引いたりすることなどできるのか、といった疑問や異論を突きつけられるであろう。とはいえ、広大で入り組んだ構造を持つ廣松哲学の全体像をとりあえず簡明な視覚野に納めるには、人間労働の「凝固物」が商品価値である、と言う程度の比喩的妥協的なことは許されるであろう。」 417-8P・・・最後の比喩は労働価値説という誤謬を産んだこととして押さえておくことが必要です。

「廣松哲学は、「一般に、物象化された存在体を廃止するためには、当の物象化をもたらす「対自然的かつ間主体的な関係」そのものの総体を根本的に再編成することが要件をなす」(本巻六頁)という基本的な構えをとっている点で、革命論とリンクしているのであり、ない

しは革命論を包蔵しているのである。」418P

二 一般理論としての物象化理論

「本巻は、マルクスの物象化論に関する廣松の主要な論稿の集成である。何の躊躇もなく
そう言えるのだが、若干の注記をしておいた萌芽よいであろう。／・・・「一」は、この巻
に収められている他の著作へのコメント・・・／二、マルクス物象化論に関する廣松の論
稿は本巻収録のものに限られるわけではない。廣松の言によれば、「マルクス物象化論に関
わる拙論は、別著『マルクス主義の地平』や『マルクス主義の理路』（共に本著作集第十巻
に収録）、さらにはまた、『唯物史観と国家論』（本著作集十一巻に収録）などにも散在して」
いる（『存在と意味』第二巻（本著作集十六巻に収録）、序文）。廣松にとって物象化論は、
上に見たように、物的世界像を批判するための拠り所となる理論装置であり、いわば物的
世界像の侵入を食い止めて事的世界観を守るための砦である。それを独自のマルクス解釈
を踏まえつつ独自に構築しななければならなかったからには、構築の過程が平坦な一本道
でなかったことは容易に推量できるし、またその一般理論としての性格上、構築の途次に
おいても構築後においても多方面の事柄への物象化論的論及を含んでいるのは当然のこと
である。「散在」している諸論及をも本巻の方へとたぐり寄せることによって、マルクス・
廣松物象化論の全体像がよりよく見渡し可能なものになるであろう。／三、廣松が「マル
クスの物象化論」（時に「マルクス・エンゲルスの物象化」と言うとき、そこには二重の意
味合いが込められている。一つは、同じく「マルクスの物象化論」といってもルカーチや
平田清明ら他の論者たちによる理解とは異なるということ。これはいわば理解の質の違い
である。もう一つは量的なことで、廣松の理解する「マルクスの物象化論」に厳格に限っ
ても、これと廣松自身の物象化論の間には射程ないし妥当範囲という点で違いがあるとい
うこと。論文「物象化の構制と射程」が廣松の理解するマルクス物象化論のエッセンスを
要約したものとすれば、跋文「物象化理論の拡張」は、マルクス物象化論を継承しつつ「拡
張」した一般理論としての廣松物象化論のアウトラインを示したものと言えよう。一般理
論として「拡張」しようとする意図は、「物象化理論」という言葉遣いに端的に表れている。」

419-20P

「「射程」論文と跋文とはこのような関連にあるが、両々相俟って『物象化論の構図』刊行
時点における廣松物象化論の到達点を示すものとして本巻の中心をなしていることは、前
者が「本書[『構図』]の基幹部」（本巻一四頁 viiP・・・斜文字単行本頁数）、後者がこれと
並ぶ「本書の中枢部」（本巻一六頁 xP）とされていることから明らかであろう。「基幹部」
と「中枢部」。字面の上からは、どちらがより重要なのか判然としないが、内容上は右に見
たような任務分担になっている。廣松の理解するマルクス物象化論マルクス物象化論の内
容については次節で瞥見することにして、ここでは、廣松によって「拡張」された物象化
論が『存在と意味』においては体系構成上どのような位置づけがなされているか見ておく
ことにしよう。」420P と書いて、『構図』と『存在と意味』の出版がかなり重なっていて、
「総ての流れは主著に注ぐ」421P と書かれています。

「廣松が第二巻の序文で、『物象化論の構図』は『存在と意味』第二巻への前梯性を強く
意識したものである。」というときの「前梯性」は、内容面での密接な連関性を意味してい
ることは言うまでもないが、と同時に、すでに『構図』刊行時点で第二巻の上梓までには

相当の年月がかかりそうだという予感が抱かれていたことの回顧的述懐でもありと言えよう。この予感は多分に、せめて構案のアウトラインなりとも早目に予示しておかねばという焦燥感の趣があった。」421Pとして、「パッチ・ワークの看」とか廣松さんの文をいろいろ引用しながら『構図』跋文が明確に『存在と意味』全三巻を射程に入れて廣松物象化論のアウトラインを提示し得ている」421Pと書いています。その後、『構図』からの文を長目に引用しています。

「著者としては、しかし、マルクスの業績を継承的に拡張しつつ、「制度」の物象化、「規範」の物象化、「権力」の物象化、ひいては、「技術」「芸術」「宗教」などの物象化を射程に収めようと図る。——しかも、そのさい、制度といっても、部署・地位・身分の編制といった狭義の制度だけでなく、また、家族・社会・国家といった次元だけでなく、デュルケームのいう *institution* すなわち「言語」などをも含む最広義の制度を念頭においている。また、規範といっても、習慣や習俗から道徳を経て法にいたる一切の規制的有意義態を念頭においている。等々。——要言すれば、一切の経済的・社会的・政治的・文化的な歴史的諸形象（「ゲビルデ」のルビ）の物象化を、統一的な原理、統一的な方法のもとに論究しようと志向する。この志向の故に、著者の場合、「役割論的構制」を導入することが不可欠の戦略的要件となる。」（本巻二六七頁 294-5P）。」422P

「一切の」とか「統一的な」という語の反復に、廣松物象化論の森羅万象性と方法論的基底性が表れている。と同時に、語るべき事柄の多大さに言葉が追いつかないというもどかしさを読み取ることもできよう。内容面については、この跋文全体の特色の一つであるが、「役割論的構制」の不可欠性が強調されている点が重要である。」422P

三 マルクス＝廣松物象化論の特質

「順序がやや前後した観もあるが、廣松の理解するマルクス物象化論の内容点検を少しく行っておこう。「物象化」とはどのような意味内容をもつ用語であろうか。廣松によれば、「物象化」あるいは「物化」という言葉で普通には次のごとき三層の表象がなされているという。なお、以下のごとき説明は本巻収録の「唯物史観の宣揚のために」のほか、『唯物史観の原像』（本著作集九巻に収録）や『世界の共同主観的存在構造』（同一巻に収録）などにおいても行われている。」423Pここで、『構図』からの引用文が続いています。省略して掲載。

「(1) 人間そのものの“物”化——たとえば、人間が奴隷(商品)として売買されるとか、単なる機械の付属品になってしまっているとかいうような状態。ここでは、人間(さしあたり他人)の在り方が「人格」としてではなく、事物と同類のものに映じ、事物と同様なものとして扱われる状態になっているという意味で「人間が物的なものになってしまっている」と看ぜられる。／(2) 人間の行動の“物”化——たとえば、駅の構内での人の流れや満員電車のなかでの人々の在り方など、群衆化された人々の動きが個々の成員の意思では左右できなくなっているような事態の謂いであり、これは或る理屈を経て、行動様式の習慣的な固定化にも通ずる。ここでは、本来人間の行動であるところのものが、個々の自分ではコントロールできない惰性態になっており、主体的意思行為に対して“自存的抵抗性”をもつようになっているという意味で「人間の行動が物的な存在になってしまっている」とされる。／(3) 人間の力能の“物”化——たとえば、彫刻とか絵画とかいった芸術的作品や、

俗流投下労働価値説的に考えられた商品価値など、ここでは、元来は人間主体に内在していた精神的・肉体的力能が、謂わば対外に流出して物的な外在的存在になって凝結するともいった意味あい「人間の力能が物的存在になっている」と表象される。」(本巻七一—七二頁 63-4P)。」 423P この後に解説者の文が続きます。

「これら三層をなす表象はいずれも、「何々が物的な存在になってしまっている」という共通の文型で括ることができる。「何々」というところに順次「人間そのもの」「人間の行動」「人間の力能」を代入すれば、物化をめぐる常識的な表象がすべて出揃うというわけだ。言い換えると、そこでは、主体(人間)と客体(事物)という二元的区分の図式が大前提をなしていて、「主体的なものが物的なものに転化する」という発想で“物”化が表象されていることになる。「物化」「物象化」をマルクス主義におけるキーワードとして流布させるうえで功績のあったルカーチの用語法にしても、またルカーチがこの語の重要性に気づく機縁となったウェーバーの用語法にしても、この図式に収まっている。あるいは、疎外と物化との連続性や補完性を強調したり、物象化というのは疎外の一特殊形態・下位概念にすぎない、としたりする日本の多くのマルクス研究者たちの捉え方も同断である。／では、マルクス当人の場合はどうか。初期においては右のような意味合いで物化・外化・対象化を語っているケースが現にみられるとはいえ、後期マルクスの「物象化」概念は、右に謂う“物化”とはおよそ異質な発想と構制になっている、と廣松は言う。端的に、「物象化」というときの「化(する)」についてであるが、後期マルクスにおいては、主体的なものが物的なものとして「化(する)」という捉え方はされていない。そうではなくて、それは廣松流に表現するなら、学理的省察者の見地にとって(フェア・ウンス)一定の関係規定態であるところの事が、直接的当事者にとっては(フェア・エス)物象の相で映現することの謂である。ただし、「関係」という言葉を用いればそれで直ちに正解というわけではない。「関係」という“もの”の相で表象しては不可である。要するに、単純化していえば、事が物象「として現れる」事態、これが物象「化」である。／なお、この伝でいけば、事が「われわれ」にとっただけでなく当事者にとってもそのまま事として現れるようにすることが廣松物象化論にとっての眼目であった、ということになる。ともあれ、物象化がフェア・ウンスとフェア・エスとの認識準位がらみの問題であるからには、これは廣松がヘーゲル『精神現象学』から抽出した対話構制としての「弁証法の論理」と密接な関連を有するわけである。この点については第四節でふれる。」 424P

「廣松は、上記三種類の常識的な表象の正しさを認めたとうえでこれに第四の捉え方を付け加えようとしているのではない。「人間」なるものを実体視していることを批判し、こうした実体視に基づいて成り立っている「主体—客体」図式そのものを排却しようとしているのである。廣松のそのような課題意識は、『資本論』などに散見される「人格の物象化」という言い回しの捉え方にも表れている。「人格」なるものを独立自存する実体として捉える常識的な捉え方に対して、廣松は、「人格」は「社会的諸関係性の一総体」なのであり、溯行すれば「関係」規定に帰趨する、というふう捉え返す。マルクスが「人間の本質」について「フォイエールバッハ・テーゼ」で打ち出した捉え方がそのもの踏襲されているわけだ。」

424-5P

「社会的諸関係」とは、『ドイツ・イデオロギー』の言葉で範式化すれば「人間の対自然

的かつ相互的な関係」であり、平たく言い換えると、物を介する人々の関係である。もちろん、「自然」という「物」も、それ自体が一定の関係規定態であるという入り組んだ関係にあるわけだが、一つの具体例を挙げて、廣松の言わんとするところを解説者の解釈も交えながら平易にパラフレーズしてみよう。上記三つの常識的な表象のうち(3)に関連しては、たとえば絵を画くという「力能」はピカソという人間に内具・内在しているのか、という問いを立てることができるであろう。答えは、もちろん否である。／まず第一に、絵画「力能」、具体的には①美意識や美的センス、ないし絵画形式で表現したいとピカソが思っている諸観念、②それを絵画形式で表現する技術などは、ピカソがそのつどの生の営みを行う中で形成されてきたものである。ピカソに限らず、誰の場合でもそうだが、「生の営み」ということの中には、多種多様な要素がギッシリと詰まっている。生きるということ自体、衣食住をはじめとして肉体的にも精神的にも「人々の対自然的かつ相互的な関係」の恩恵をこうむっており、生きるとは生きさせてもらっているということである。このような基本的真実はいま脇に置いて、当面の文脈で必要な最小限の要素だけを取り出しても、①ピカソ以前の時代の、あるいはピカソと同時代の画家たちの作品を鑑賞し研究して、そこからさまざまなものを学んだり摂取したりすること、②そのつどの自然や社会のあり方、人間模様などを、つまりは世界を観察すること、こうした①見る眼と②見る対象からして、そのつど一定の(ピカソ自身に限っても何年何月何日に、どこそこで、だれと、どんな具合に、という、そのつどの特定性を帯びた、また、もっと大きくいえばブリューゲルの生きた時代や社会・生活環境、そして目にすることのできた絵画作品群など、とは違った)社会的諸関係に入り込みつつ絵画する者として生きる中で得られたものであり、つまりは「人々の対自然的かつ相互的な関係」の所産である。／表現技術にしても同様である。①師匠から教える場合、師匠が一人のときは、「人々の」対自然的かつ相互的な関係という言い方はできないが、しかし、少なくとも、師匠が現に師匠としての「地位」を獲得し得ている事態をも考慮に入れると、その「地位」は人々による評価の積み重ねの所産として、やはりさまざまな形での「人々の」対自然的かつ相互的な関係の所産であるという理屈が成り立つ。②たとえ師匠の教えるを受けずに独力で表現技術を磨いたという場合でも、作品がそのつど受け手たちにどのように受け止められるかに応じて磨き方が違ってくるという意味で、そして受け手たちに評価されないような磨き方にいくら精出したところで表現技術としては無であるという意味でも、やはり「人々の対自然的かつ相互的な関係」の所産である。／第二に、右のような絵画「力能」が一定の歴史的・社会的・文化的な形成体(「人々の対自然的かつ相互的な関係」の所産)としてであれピカソという人間に「内具・内在する」に至ったと仮定しても、しかしそれを表出するには表出する手段(カンヴァス、絵の具、鉛筆などの画材)が必要である。表出されない「力能」は無であり、断じて「力能」などではない。それはちょうど、みずからの生産手段を所有しない賃金労働者の場合、その労働力は当の労働者が資本家に雇用されて生産手段と出会うまでは無であるのと同様である。画材はメーカーや職人たちの生産物であり、そして生産物を生産するには原材料が必要であることを考慮すればなおのこと、画材は「人々の対自然的かつ相互的な関係」の所産であることは明らかである。画材なしには絵画「力能」は表出しようがないから、それは「無」「力能」であり、やはり絵画「力能」はピカソという人間に内具・内在しているのではない

いということになる。／第三に、これらの諸要件が満たされてようやく作品が出来上がったとして、ではその作品が受け手にどのように受け止められるか、つまりピカソの当該作品に関する絵画「力能」がどのように評価されるかという段になるが、ここでもやはり、先ほども関説したように「人々の対自然的かつ相互的な関係」のあり方次第で「力能」の有無が岐れる。受け手たちに表されれば「力能」有りということになるし、そうでなければそうでない。しかも、評価の基準(「間主観的な美意識」)そのものも一定の歴史的・社会的・文化的な形成体である。つまり「人々の対自然的かつ相互的な関係」の所産であるという事情が加わる。／このように多様な、幾重もの「人々の対自然的かつ相互的な関係」の所産として、三要件が揃ってはじめて絵画「力能」は存在する。けっして画家に内具・内在しているのではない。廣松物象化論の独自性は、このような理屈を、価値・価値法則・需給関係といった経済事象一般、真・善・美・聖などの文化価値一般、制度・規範・権力といった社会形象一般にまで、まさに一般理論として「拡張」してところにある。それらの諸項目に関する個別的な論及は諸論稿のあちこちで行われている。そして『存在と意味』において、各巻ごとの主題に即して考察対象の割り振りと叙述が体系的に行われるはずであった。現に第一巻・第二巻分については行われている。」425-7P

「なお、廣松による物象化論の「拡張」という点について付言しておかねばならない点がある。マルクス・エンゲルスにおいては物象化の概念が人と人との関係に局定されているのに対し、廣松は、ある種の自然的・事物的関係も物性化したり実体化したりして錯認されることがあるというふうに、物象化の概念を「拡張」している。人々の関係だけでなく、事物関係をも含めて、関係プロパーにまで、「拡張」して物象化ということと言おうとする。そしてそのことは「マルクス・エンゲルスの発想法や存在観に牴触しないと考える」(本巻一〇二頁 96P)。はたしてそう言い得るかどうか。この点も一つの検討課題となるであろう。」427-8P

四 物象化論と弁証法および唯物史観との内的連関

「廣松哲学は有機的な一全体をなしており、またそのようなものとして接するように心がけることで理解がいつそう深まるであろう。とはいえ、一全体を構成する諸部分間にも、眼球と足の指との連関よりは耳鼻咽喉間の連関の方がより密であるというように、連関度に大小差がある。廣松物象化論についていえば、さしあたり物象化論と弁証法と唯物史観とが耳鼻咽喉連関をなしていると言えよう。」428P

「まず弁証法との連関について見ておくと、①「学理的省察者の見地にとって(für uns)一定の関係規定態であるところの事が、直接的当事者には(für es)物象の相で映現する(本巻二四五頁 267P)という把握は、先にも少しふれたように、まさにヘーゲル『精神現象学』における「フェア・エス(当事者にとって)とフェア・ウンス(学知にとって)」という構制を適用したものにほかならず、②さらに、「事がわれわれにとってだけでなく当事者にとってもそのまま事として現れるようにすることが廣松物象化論の眼目であった」という言い方が許されるとするなら、これまで、われわれと当事者との対話的構制のうちに当事者の認識準位の自己止揚を図るという「弁証法の論理」そのものということになる。ただし、一口に「弁証法の論理」といっても、ヘーゲル自身において『精神現象学』と『論理学』とでは違いがあるうえ、廣松が顕揚する前者の弁証法にしても、「フェア・ウンスということは、

ヘーゲルにあっては、学知が静観者という建前になっている」(本巻一二八頁 127P)と廣松は批判するのであって、したがって廣松によって整備改作された限りでの「弁証法の論理」がここ物象化論の場面においても適用されている、という複雑な事情もからんでいる。がしかし、これらの点も含めて、「弁証法の論理」については、幸い廣松には『弁証法の論理』という主題的考察もあることなので(本著作集第二巻に収録)、そちらの解説に譲ることにしたい。」428-9P

「次に、廣松の「歴史」把握つまりは唯物史観について見ておくことにしよう。廣松の唯物史観については、本著作集第十一巻の解説でくわしく述べられることになっているので、ここでは物象化論との内的連関についてごく手短な整理を行うにとどめる。／『物象化論の構図』に第I論文として「唯物史観の宣揚のために」(原題、「唯物史観の宣揚」、初出、『思想』一九八二年五月号)が収録されていること自体からして、物象化論と唯物史観との密接な連関を予科させる。廣松の「唯物史観」把握は、「自然弁証法」ならびに「史的唯物論」という二大部門に対して「弁証法的唯物論」という“第一哲学”が先行するかのとき構制をとる、いわゆるマルクス・レーニン主義の教科書的常識とはおよそ異質である。廣松にあっては、「唯物史観は、断じて、自然界と並ぶ歴史界という半球に関わる通常の歴史観ではなく、総体的な世界観である」(本巻二一頁 4P)、「唯物史観はマルクス主義理論体系の単なる一部門ではないこと、それはマルクス主義的世界観の構制そのものである」(同)とされるのであって、あえて解説的な対比をするなら、むしろ唯物史観こそが、“第一哲学”をなしている。「歴史の学」こそが唯一の学であって、自然の歴史と人間の歴史は唯一の歴史の二側面をなすにすぎない。／ここでも、「近代哲学流の構図」そのものを批判し止揚せんとする廣松の基本姿勢が貫かれる。「マルクス・エンゲルスは、自然界と人間界(自然界と歴史界)とを両断する近代哲学流の存在了解をそもそも採っていないのである」(本巻二〇頁 3-4P)。人間界(歴史界)はもとより自然界も「人々の対自然的かつ相互的な関係」の所産にほかならないからには、これを独立自存視することはできない道理であってもこのような独立自存視を斥けようとする点で物象化論が唯物史観と不可分の内的連関をもつことになる。「形成史的にみれば、疎外論の地平から物象化論の地平への飛躍、これがまさしく唯物史観の設定と相即する」(本巻七六頁 69P)。」429-30P

「ちなみに、唯物史観が「マルクス主義の世界観そのものである」ということになれば、これと事的世界観との異同関係はどうなるのであろうか。もとより、二つの世界観があるわけではない。「関係の第一次性」を機軸概念とする構制をもつ世界観である点で、両者は一つである。では、唯物史観のことを事的世界観と言い換え、あるいは事的世界観のことを唯物史観と言い換えることは可能か。つまり、名称はどちらか一つで足りるか。もちろん否である。／事的世界観は廣松哲学の、そして廣松にとっては事実上マルクス=廣松哲学の、最も包括的な枠組み名称であって、一切の存在を関係規定態として捉える、あるいは捉え返す。この把握作業は四肢構造論を核とする存在構造論として行われる。しかるに、一切の存在は、「人間」はもとより人間界も、そして自然界もすべて歴史内存在である。このように、一切の存在を歴史内存在として捉える、あるいは捉え返す世界了解の構えが唯物史観である。「一切」の存在について当てはまることであるから唯物史観は「唯一の」学なのである。一切の存在は歴史内存在であり、かつ関係規定態としてある。「事」とは「関

係」のことであるが、「関係」はつねに「歴史」性を帯びているわけである。そのことは通奏低音のごとくつねに基調をなしており、したがって一切の存在を歴史内存在として把握しようとする眼はつねに見開かれている。その意味では唯物史観が事的世界観のいわば基底部をなしている。そのことを当然の前提にしながらも、「歴史」性をいったん括弧に入れて話を進め得る場面では、事的世界観のいわば上層部をなす存在構造論が表立つことになる。手短な「解説」の範囲内のこととしては、事的世界観と唯物史観との「相即」関係について、とりあえずこのように言い得るであろう。」430P・・・*通時的・共時的という概念*

五 物象化論の意義

「物象化は、「人々の対自然的かつ相互的な関係」として把握されるべきものを、人々が共同主観的に独立自存視してしまうことの謂であった。平たく言い換えると、この「関係」は人々がみずから支え合っているものでありながら、まるでこの「関係」から独立に何らかの物象が自存しているかのように当の人々が否応なく見なしてしまうわけである。ただ単に意識の面で錯誤に陥ってしまうというだけでなく、そのような錯誤することによって、行動のあり方までをもみずから規制してしまうのである。」431P

「廣松にあっては、物象化論は批判的理論体系であるといっても、批判作業の末に“絶対知”の高みにまで到り着いて自己完結的に閉じてしまうというのではなく、まさに「実践」へと開かれた理論体系をなすのである。実践論は端的に共産主義社会の実現を目指す革命論として構想される。その理由は、たとえば次のように説明される。／「物象化は、フェア・ウンスには錯認であるといっても、現体制下の「対自的かつ間人間的な現実的諸関係」に存在根拠をもつものであって、かの“大地不動・太陽廻天”の錯認とも類比的に、当該システムに内在するかぎり“必然的・現実的”であり、認識を改める(誤謬を理論的に矯正する)といった単なる意識活動によって克服されるものではない。物象化を克服するためには、その存在根拠をなしている現実的諸関係を現実に変革することが必須の要件である。旧来の現実的諸関係を解体しないかぎり、物象化現象が不断に生産・再生産される。」(本巻一三八頁 139P)。／ここに述べられている「物象化の克服」は「資本主義的生産関係そのものを止揚する」というレベルの、いわば最大限綱領としての「物象化の克服」である。もし「物象化の克服」が終始このレベルでしか問題にならないのだとすれば、「物象化の克服」はずっと先々の、何とも迂遠な話になってしまう。それでは「物象化論の意義」も“半減”してしまおう。しかし実際には、それ以外の多様なレベルにおいても「物象化の克服」は可能である。」431-2P

「人々は、国家権力というものは自分たちの向こう側に圧倒的な威力として、時には強大な壁としてそそり立っているかのように思いなす。実は、選挙における投票行動などを通じて自分たちこそが共同主観的に(寄ってたかって)形成し、かつ支えているものにほかならないのに、人々による絶えざる有形無形の支えなしにはいかなる国家権力も存立し得ない。反面からいえば、国家権力は、その形成者にしてかつ支え手である当の人々によって解体可能なものとしてある。いきなり解体ということまで言わずとも、国家権力のあり方を是正し改善することは、少なくとも理屈としては、その存在構造からすれば、いくらでも可能なわけである。」432-3P・・・*人々の共同主観的(「共同幻想」に乗った)活動が「権力」なるものを生み出していく。唯物史観的に言えば、日々の生活、たとえば貨幣の使用など*

が、物象化された世界の土台としてあって、それらのことも対象化した変革が必要になってくることです。

「実際にはしかし、「権力の側」なるものは存在しないのであり、存在するとしても物象化的錯認においてのみであり、真実態として存在するのはつねに「人々の対自的かつ相互的な関係」だけである。しかし当の人々が権力は自分たちの手の届かないところに独立自存していると思いついていて、行動のあり方も、最初から是正や改善を諦めてしまうか、何でも反対の野党根性から脱けきれないということになってしまいがちである。／権力は解体可能であるどころか、少なくとも民主国家においては、権利上だれもが「権力」者になれる可能性を有する。「権力」者への道はだれにでも開かれてある。内閣総理大臣であれ大統領であれ、高級官僚であれ最高裁判官であれ、高級官僚であれ最高裁長官であれ——。第一次的に存在するのは「人々の対自的かつ相互的な関係」であるという理屈(うんと平俗化していえば、一定の範囲内では人々のやり方次第で何とでもなる、という理屈)は、ある意味では自明のものと言ってよいのだが、なかなか自明のものとはなっていないのが実情であるために物象化の出番と意義もあるわけである。」433P・・・「権利」という概念自体が物象化された支配—被支配の概念。フョイエルバッハに関するテーゼ「哲学者たちはただ世界を様々に解釈してきたにすぎない。肝腎なのは、世界を変革することである。」実践的にどう立てるかが問題。廣松さんが体制論までなぜ展開しようとしたのか？

「解説 マルクス／廣松の物象化論——途切れた意志の<かなた>へ—— 熊野純彦」
(廣松渉『物象化論の構図』岩波書店(岩波現代文庫)2001所収)

バリバリの哲学者のエッセイストのような文からこの解説は始まります。「ことばには<いのち>がある。すべてのことばに生命が宿る、というわけではない。思想界に流通するほとんどのことばたちは、<いのち>をもつ間もなくうたかたのように消え去ってしまう。いくつかの、ほんとうに本質的なことばだけが、この世に送り出されたのちも、何人かの人間によって生命を吹き込まれて<いのち>をつなぎ、生命をもって世界を動かしてゆく。そうしたことばもまた、時が移ればふと生命のともし火を消して、ふたたび<いのち>が吹き込まれるのを秘やかに待ちつづけることになるだろう。／「物象化」ということばが、そうであるように見える。マルクスによって書きとめられ、この国では誰よりも廣松渉がそれに生命を与えなおした「物象化論」こそが、そのようなことばであるように思われる。そうであるとすれば、廣松が「物象化」ということばを見出し、それに<いのち>を与えかえしていった道ゆきが、なによりも先ずふりかえられる必要があるだろう。」151-2P

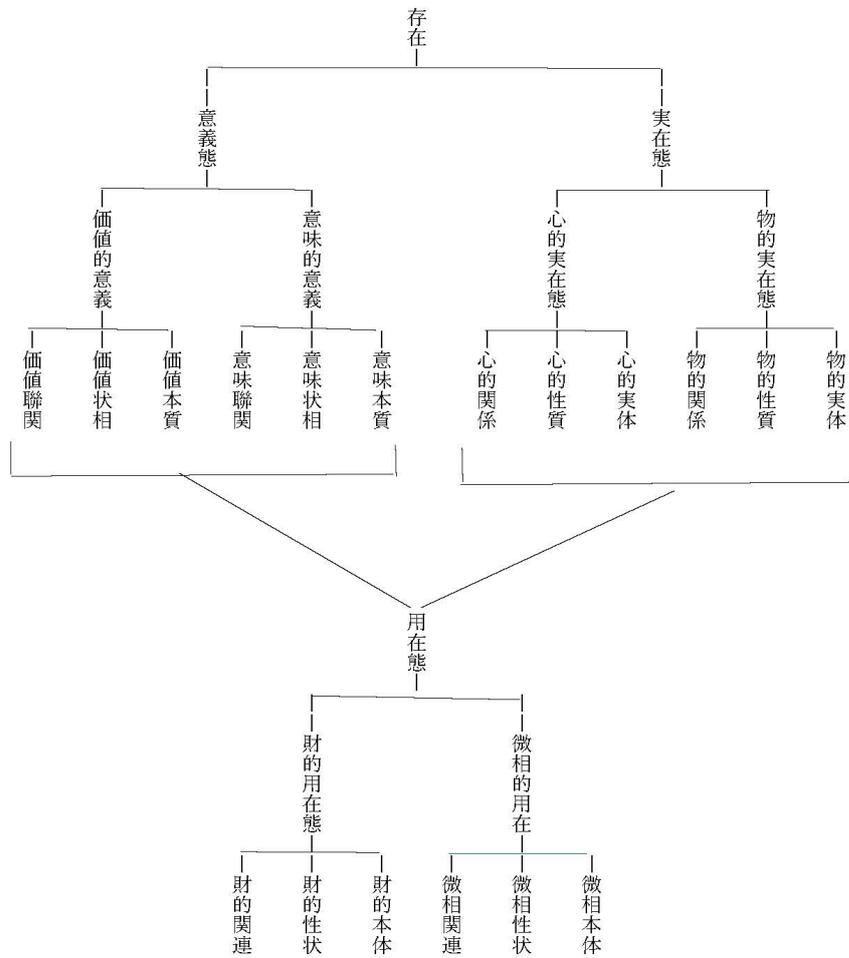
「みずからもその創刊のために尽力した雑誌の、創刊第二号のために、廣松渉は「マルクス主義成立期の“状況”」という稿を草する。小林昌人が作成した年譜によれば、廣松はしかし「創刊号を手にしてテーマを変更し「マルクスの物象化論」を急遽執筆」したとのことである。一時代を劃することになる論稿は、そのようにして生み落とされた。同時にまた「物象化論」はマルクス／廣松の名とむすびあって、「デモの足並みで文字通り揺れていた」この国の街頭とキャンパスを駆けぬけてゆくことになる。」352P

「現在では『マルクス主義の地平』(勁草書房、一九六九年刊。講談社学術文庫ならびに岩

波版『廣松渉著作集』第一〇巻に再録)の第七章(『資本論』における物象化論)と第八章(「疎外論」から「物象化論」へ)を構成する「マルクスの物象化論」の本論は、『資本論』で説かれる「物象化」(Versachlichung)「物化」(Verdinglichung)という概念が、マルクスのいう「物神崇拜」(Fetischismus)「物神的性格」(Fetischcharakter)と分かちがたく結びあっていることの指摘から説きおこされる。いまや(ほかならない廣松の著書によって)常識となっていることがらをも含むが、いちおうひとわり確認しておく。」353Pとして『資本論』を巡るフェティシズムの論稿が続きます。

それを受けて「さて、以上かけ足で見てきた、マルクス／廣松による「物象化論」の原型から、さしあたり三つの論点を取りだしてみることができる。ひとつは、マルクスの思想形成史上における物象化論の位置である。物象化論ははたしてほんとうに、いわゆる疎外論を超えた新たな境地を切りひらくものであったのだろうか。廣松による(三〇年にわたるその著作活動のなかでも)ほとんど最終回答とあってよいものが本書の第Ⅰ論文のうちで与えられている。それを受けて、もう一つの論点はこうなるであろう。物象化論が疎外論とはことなる、劃期的な世界観を可能にするものであるとして、物象化論はしかし疎外論が有していた批判的機能をどのように継承しえたのであろうか。本書の第Ⅱ論文が、議論がわかるこの問題に対する廣松の答えとなるはずである。最後にしかし、第三の微妙な論点がこのころ。マルクスの物象化理解と、廣松の哲学、その中核をかたちづくるかぎりでの物象化論そのものとは、どのような関係にあり、どのような差異と同一性の関係にあるのだろうか。本書所収の「マルクスにおける哲学」(第Ⅴ論文)が廣松がとらえたかぎりでのマルクスの哲学観をつたえている。本書の第Ⅲ論文が、そして、廣松によるマルクス商品論読解と、その哲学的な一般化とを、その原型において示すものなのであった。／一九九四年五月、著者の廣松渉は世を去った。逝ってしまった者たちは、すべからく生者の源左を不安にする。なお生きて在る者も遠からず死んでゆくことを、死者たちがあらためて想い起こさせるからではない。すくなくともそれだけではない。死者が現在を揺り動かしてやまないのは、世を去った者たちがかならずなにかを遺してしまっているからだ。不意に、暴力的に中断された意志の痕跡が、それぞれの現在を生きている人間たちによびかける。たしかに存在したものを忘却してしまっただけでよいのか、現前したものがあとかたもなく消失してしまうことは不正ではないのか、という絶対的な問いとして呼びかけてくる。廣松渉が、すぐれてそうである。廣松の不在は、遺された巨大な足跡と、途切れた意志の痕跡の<かなた>にあるものによって、たえず私たちを揺り動かしている。本書もまた、そうした「足跡」そのものの巨大さと、「痕跡」のかなたへといたる、遙かな道程を示しつつける著作となることだろう。」356-8P

附録 「物象」の規定態図



(編集後記)

◆今回はバタバタしていて、予定期日から遅れそうになったのですが、何とか間に合いました。前号にも書きましたが、今年一杯は月二回発刊を続ける予定です。来年からは月1回に戻し、宿題の同時並行的掲載に踏み込んでいく予定です。

- ◆巻頭言は、アメリカの大統領選の前にと、この間のファシズム論の論考を活かして、トランプの言動はファシズムそのものだ、言っても過言ではないことと書きました。
- ◆読書メモは、『物象化論の構図』の5回に分けての最終回。5回分をメイン（「反障害—反差別研究会」）のホームページの「廣松ノート」に掲載しました。当該原稿は巻頭言の後の「HP 更新通知・掲載予定・ブログのこと」参照。
- ◆「インターネットへの投稿から」は、投稿したやりとりを掲載すべく準備していたのですが、いろいろ考え、出すのを止めました。その内容は、後日の号の巻頭言の文にしたいと思っています。
- ◆この号の発刊は、丁度衆議院選の選挙活動のまっただ中です。腐りきった政治——社会を変えていくことが、野党の保守化の中で、「社会変革への途」がとらえられなくなっています。「社会変革志向」（すなわち左派）がきちんと定立してはなりません。もっと根本的なところから、問題をとらえ、その途を見出す作業が必要になっています。尤も、勿論、選択肢がない中でも、ましな保守や「問題がある党」を選択することは次善の策としてやらなくてはならないのですが。
- ◆「通信」157号 2024.9.18 の「巻頭言」の「能力をコモンとしてとらえる！」に繋がる文を、今回の「読書メモ」で見つけました。およそ生産活動や労働力において、最も「能力を個人がもっている」と「錯誤」してとらえられやすい事例は芸術的才能と言われることです。ピカソの才能なることで、『廣松渉著作集』の解説で、高橋さんが書いた文の中に、そのようなこととリンクする文です。「たとえば絵を画くという「力能」はピカソという人間に内具・内在しているのか、という問いを立てることができるであろう。答えは、もちろん否である。……このように多様な、幾重もの「人々の対自然的かつ相互的な関係」の所産として、三要件が揃ってはじめて絵画「力能」は存在する。けっして画家に内具・内在しているのではない。」425-7P（「解説 高橋洋児」（『廣松渉著作集 第十三巻 物象化論』岩波書店 1996 所収）

反障害—反差別研究会

■会の方針

「障害学において、「障害とは何か」という突き詰めがなされないまま、議論の煮詰めもなされないままでした。そこから起きる混乱が、「障害者運動」の方向性を見出していく作業を妨げていました。イギリス障害学が障害の医学モデルから「社会モデル」への転換をなそうとしました。しかし、もう一段掘り下げた作業をなしえぬまま、医学モデルへの舞い戻りという事態が起きているようです。また、各国で差別禁止法とか「解消法」が作られています。そこでのモデルは結局医学モデルでしかない状態です。この「会」でやろうとしている議論・研究は、障害問題を解決していくための「障害者運動」のための理論形成の作業です。「会」としては「社会モデル」から更に、関係モデルへの転換を提起しています。実は、日本の「障害者」の間では、既にこの議論を先取りするような議論もなされていました。そのことが整理されないままになっています。改めてそれらのこともとら

え返ししながら、議論をすすめて行きたいとも思っています。また、障害と差別はかなり重なる概念です。他の反差別運動の中での議論や認識論的議論も織り込みながら、議論を進め理論形成していきます。そして、「差別はなくなる」とか「社会の基本構造は変わらない」という意識が、今のこの社会を覆っていきます。そういう中で、今の社会の枠組みに限定した議論になっていき、そのことが論の深化を妨げる事態も生じています。だから、過去の社会を変えようという運動の総括も必要になっています。そのことにも、差別ということをキー概念としながら議論・深化していきたいと考えています。(文責 三村)

■連絡・アクセス先

Eメール hiro3.ads@ac.auone-net.jp (三村洋明)

反障害一反差別研究会 HP アドレス <http://www.taica.info/>

「反障害通信」一覧 <http://www.taica.info/kh.html>

反差別資料室 C <https://hiro3ads6.wixsite.com/adsshr-3>

ブログ「対話を求めて」 <http://hiroads.seesaa.net/>

反差別資料室 A <https://hiro3ads6.wixsite.com/adshr1>